

日本国特許庁
PATENT OFFICE
JAPANESE GOVERNMENT

09/666481
JCPUS/2000
09/2000

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されて
いる事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed
with this Office.

出願年月日
Date of Application: 1999年12月27日

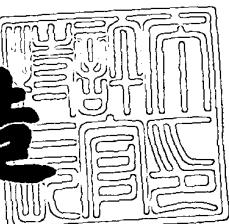
出願番号
Application Number: 平成11年特許願第369205号

出願人
Applicant (s): 株式会社ケミクレア

2000年 8月25日

特許庁長官
Commissioner,
Patent Office

及川耕造



出証番号 出証特2000-3068937

【書類名】 特許願

【整理番号】 P25024J

【あて先】 特許庁長官 近藤 隆彦 殿

【国際特許分類】 C07D275/02

C07B 37/10

【発明者】

【住所又は居所】 東京都中央区日本橋富沢町10番18号 株式会社ケミ
クレア内

【氏名】 森田 雅之

【発明者】

【住所又は居所】 東京都中央区日本橋富沢町10番18号 株式会社ケミ
クレア内

【氏名】 劉 国斌

【発明者】

【住所又は居所】 東京都中央区日本橋富沢町10番18号 株式会社ケミ
クレア内

【氏名】 米田 紀子

【特許出願人】

【識別番号】 000180586

【氏名又は名称】 株式会社ケミクレア

【代理人】

【識別番号】 100073184

【弁理士】

【氏名又は名称】 柳田 征史

【選任した代理人】

【識別番号】 100090468

【弁理士】

【氏名又は名称】 佐久間 剛

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 008969

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9002724

【プルーフの要否】 要

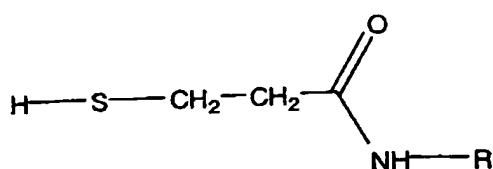
【書類名】明細書

【発明の名称】2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法

【特許請求の範囲】

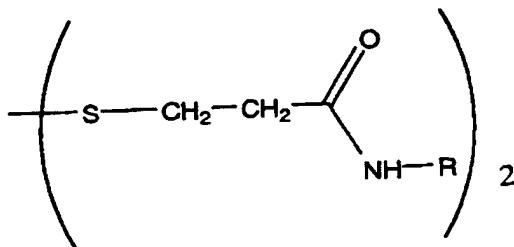
【請求項1】 塩化水素が不溶もしくは難溶である溶媒中で、一般式(I)

【化1】



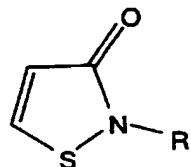
(ただし、RはC₁～C₈のアルキル基またはアラルキル基)で表される化合物
または一般式(I I)

【化2】



(ただし、式中、Rは一般式(I)と同義である)で表される化合物を、一般式(I)を用いた場合には一般式(I)1モルに対してほぼ2モル当量、一般式(I I)を用いた場合には一般式(I I)1モルに対してほぼ3モル当量の塩素化剤と反応させることからなる一般式(I I I)

【化3】



(ただし、式中、Rは一般式(I)と同義である)で表される2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法。

【請求項2】 前記溶媒が、一般式(I)、一般式(I I)、一般式(I I I)および塩素化剤に不活性であることを特徴とする請求項1記載の2-アルキ

ル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法。

【請求項3】 前記溶媒に対する、常温常圧下における前記塩化水素の溶解度がモル分率で0.04以下であることを特徴とする請求項1または2記載の2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法。

【請求項4】 前記溶媒が、有機溶媒であることを特徴とする請求項1、2または3いずれか1項記載の2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法。

【請求項5】 前記有機溶媒が、ハロゲン化脂肪族炭化水素類、ハロゲン化芳香族炭化水素類、脂肪族炭化水素類より選択されることを特徴とする請求項4記載の2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法。

【請求項6】 前記溶媒が、ジクロロメタン、ジクロロエタン、トリクロロエタン、テトラクロロエタン、クロロホルム、四塩化炭素、モノクロロベンゼン、ジクロロベンゼン、ペンタン、ヘキサン、シクロヘキサン、ヘプタン、オクタンからなる群より選ばれた少なくとも1つであることを特徴とする請求項5記載の2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法。

【請求項7】 前記Rがメチル基であることを特徴とする請求項1から6いずれか1項記載の2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法。

【請求項8】 前記Rがノルマルオクチル基であることを特徴とする請求項1から6いずれか1項記載の2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法。

【請求項9】 一般式(I)または一般式(II)と前記塩素化剤との反応により生じる一般式(III)の塩酸塩を、取り出し、前記塩酸塩が難溶であって、前記塩酸塩と反応しない溶媒で前記塩酸塩を洗浄する工程をさらに含むことを特徴とする請求項1から8いずれか1項記載の2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、工業用殺菌剤として有用な2-アルキル-4-イソチアゾリン-3

一オン類の製造方法に関するものである。

【0002】

【従来の技術】

従来、イソチアゾリン-3-オン類の工業用殺菌剤は、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類と5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の混合物として使用されてきた。しかし、近年5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の変異原性等が問題となつたため、5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の含量が少ない、または全く含まれていない2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の需要が高まっている。

【0003】

2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法としては、いくつかの方法が開示されている。例えば、米国特許第3849430号、及びヨーロッパ特許第95907号には、酢酸エチル溶媒中でN-アルキル-3-メルカプトプロピオンアミドを塩素化し、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類と5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の混合物を得ている。しかしながら、これらに記載されている製造方法は、5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の含量を抑える工夫はなされていない。

【0004】

ヨーロッパ特許第0437354号には、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類塩酸塩と5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類塩酸塩の混合物を、無水アンモニアで5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類塩酸塩だけを中和し、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を比較的高い純度で分離する方法が記載されている。しかし、この製造方法は操作が煩雑であり、依然として変異原性を起こすレベルの5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類が含まれている。また、これを除去しようとすると、除去しようとする5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の分だけ有意の得量の損失を生じる。

【0005】

また、ヨーロッパ特許第0678510号では、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類塩酸塩と5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類塩酸塩の混合物を有機溶媒中で加熱し、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類塩酸塩と5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類塩酸塩の有機溶媒に対する溶解度の差を利用して、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類塩酸塩を精製しているが、この方法によっても依然として変異原性を起こすレベルの5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類が含まれており、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の得量の損失は避けられない。

【0006】

【発明が解決しようとする課題】

上記のように、従来の製造方法は、製造段階において2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を優先的に製造させるというものではなく、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類と5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を含んだ混合物から、精製により2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を得るというものであった。

【0007】

しかし、5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を完全に精製により取り除くことは困難であり、また、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の得量の損失となる。さらに精製工程が増えると製造操作が煩雑化する。従って、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を高純度かつ工業的に採算のあう収率で得るには、製造段階において5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の生成を極力抑えることにより、精製による得量ロスを少なくする方が好ましいと考えられる。

【0008】

本発明は上記事情に鑑みなされたものであり、5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を含まないか、または含んでも変異原性を起こさないレベルであって、工業的に簡便かつ採算にあう収率で、高純度の2-アルキ

ル-4-イソチアゾリン-3-オン類を得る方法を提供することを目的とするものである。

【0009】

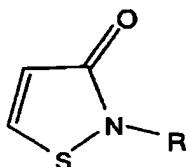
【課題を解決するための手段】

本発明者らは5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の生成を極力抑えた2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法について鋭意検討を重ねた結果、反応に用いる溶媒種により、生成する2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類と5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類との選択性が大きく変化するという予想されない事実を見た。すなわち、反応に使用する溶媒の塩化水素の溶解度と、生成する2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類と5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の比に、相関関係があることを見いだし本発明の完成に至ったものである。

【0010】

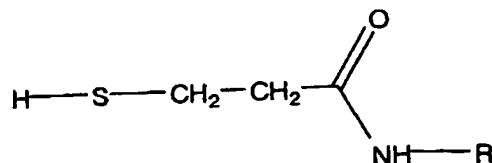
本発明の、一般式 (III)

【化4】



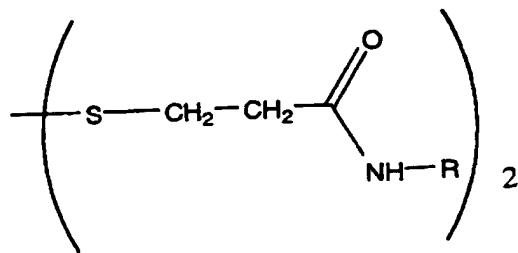
(ただし、RはC₁～C₈のアルキル基またはアラルキル基)で表される2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法は、塩化水素が不溶もしくは難溶である溶媒中で、一般式 (I)

【化5】



(ただし、式中、Rは前記一般式 (III) と同義である)で表される化合物または一般式 (II)

【化6】



(ただし、式中、Rは前記一般式（III）と同義である）で表される化合物と、一般式（I）を用いた場合には一般式（I）1モルに対してほぼ2モル当量、一般式（II）を用いた場合には一般式（II）1モルに対してほぼ3モル当量の塩素化剤を反応させることからなることを特徴とするものである。

【0011】

一般式（I）、一般式（II）及び一般式（III）の式中Rは、C₁～C₈のアルキル基またはアラルキル基であるが、工業的にはメチル基またはノルマルオクチル基であることが好ましい。

【0012】

前記溶媒は、一般式（I）、一般式（II）、一般式（III）および塩素化剤に不活性であることが好ましい。不活性とは、溶媒が、一般式（I）、一般式（II）、一般式（III）および塩素化剤と反応しないことを意味する。

【0013】

また、前記溶媒は塩化水素が不溶もしくは難溶であるが、具体的には常温常圧下における前記塩化水素の溶解度がモル分率で0.04以下であることが好ましく、より好ましくは0.03以下、さらには、0.02以下であることが好ましい。

【0014】

前記溶媒は、有機溶媒、特に、ハロゲン化脂肪族炭化水素類、ハロゲン化芳香族炭化水素類、脂肪族炭化水素類より選択されることが好ましく、具体的には、ジクロロメタン、ジクロロエタン、トリクロロエタン、テトラクロロエタン、クロロホルム、四塩化炭素、モノクロロベンゼン、ジクロロベンゼン、ペンタン、ヘキサン、シクロヘキサン、ヘプタン、オクタンからなる群より選ばれた少なく

とも1つであることが好ましい。

【0015】

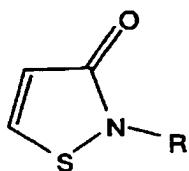
本発明の2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法は、一般式(I)または一般式(II)と前記塩素化剤との反応により生じる一般式(I)の塩酸塩を、取り出し、前記塩酸塩が難溶であって、前記塩酸塩と反応しない溶媒で前記塩酸塩を洗浄する工程をさらに含むことが好ましい。

【0016】

【発明の効果】

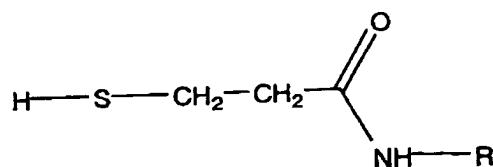
本発明の一般式(III)

【化7】



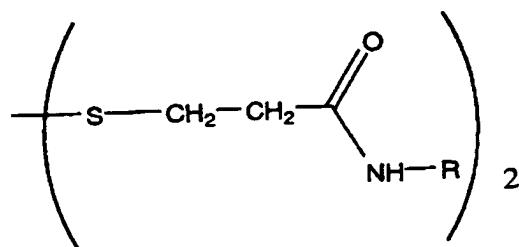
(ただし、RはC₁～C₈のアルキル基またはアラルキル基)で表される2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法は、塩化水素が不溶もしくは難溶である溶媒中で、一般式(I)

【化8】



(ただし、式中、Rは一般式(III)と同義である)で表される化合物または一般式(II)

【化9】



(ただし、式中、Rは一般式(III)と同義である)で表される化合物を、一

般式(I)を用いた場合には一般式(I)1モルに対してほぼ2モル当量、一般式(II)を用いた場合には一般式(II)1モルに対してほぼ3モル当量の塩素化剤と反応させることとしたので、変異原性物質である5-クロロ-2-イソチアゾリン-3-オン類をほとんど含まず、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を高い選択性で得ることができる。

【0017】

また、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を選択性的に得ることができるので、従来の2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法のように精製を繰り返す必要がなく、従って精製による得量の損失が極めて少ないので、経済的に有利である。

【0018】

なお、常温常圧下における塩化水素の溶解度がモル分率で0.04以下である溶媒を用いることにより、上記効果を得ることができる。

【0019】

また、一般式(I)、一般式(II)、一般式(III)および塩素化剤に不活性である溶媒を用いることにより、副生物の生成をより効果的に抑えることが可能となる。

【0020】

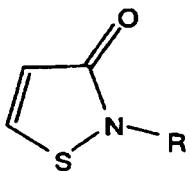
さらに、一般式(I)または一般式(II)と塩素化剤との反応により生じる一般式(III)の塩酸塩を、取り出し、この塩酸塩が難溶であって、塩酸塩と反応しない溶媒で塩酸塩を洗浄することにより、より高純度の2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を製造することができる。

【0021】

【発明の実施の形態】

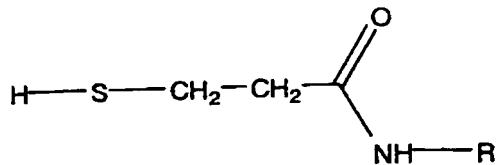
以下に、本発明の好ましい実施の形態について詳細に説明する。すなわち、本発明の、一般式(III)

【化10】



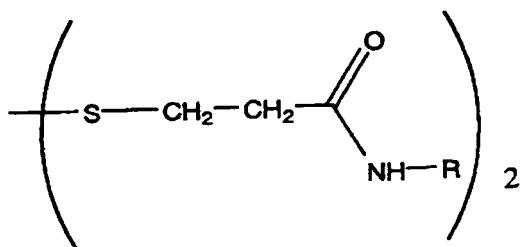
(ただし、RはC₁～C₈のアルキル基またはアラルキル基)で表される2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法は、塩化水素が不溶もしくは難溶である溶媒中で、一般式(I)

【化11】



(ただし、式中、Rは前記一般式(III)と同義である)で表される化合物または一般式(II)

【化12】



(ただし、式中、Rは前記一般式(III)と同義である)で表される化合物と、塩素化剤を反応させるものである。

【0022】

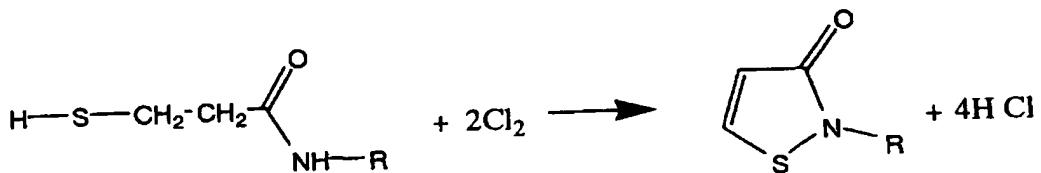
本反応に用いる一般式(I)または一般式(II)で表される化合物の合成法は特に限定されないが、例えば対応するアルキルエステル類とアルキルあるいはアラルキルアミン類を無溶媒、または反応に不活性な有機溶媒中でアミド化することにより容易に得られる。一般式(I)または一般式(II)で表される化合物は、再結晶や蒸留等で精製して本反応に用いても良いが、アミン類の残留分を極力抑えておけば、粗生成物でも充分本反応に使用することができる。

【0023】

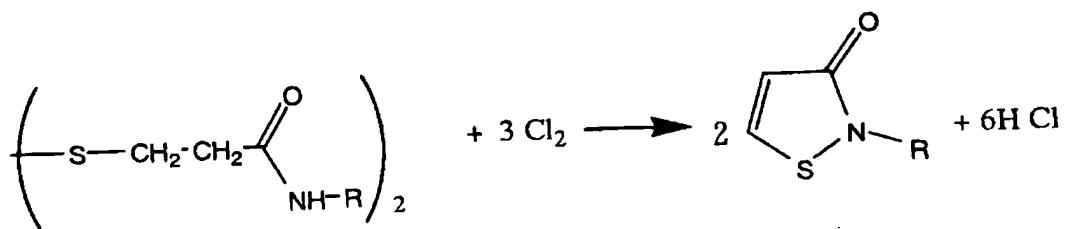
本反応に使用する塩素化剤は特に限定されず、例えば塩素ガス、塩化スルフル等を用いる事ができるが、工業的には塩素ガスが最も好ましい。塩素化剤を必要以上に使用すると、5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類が生成しやすくなるので、塩素化剤の使用量は、一般式(I)を用いた場合には一般式(I)1モルに対してほぼ2モル当量、一般式(II)を用いた場合には一般式(II)1モルに対してほぼ3モル当量の塩素化剤を用いることが好ましい。すなわち、下記の一般式(IV)および一般式(V)で示されるとおり、一般式(I)であれば1.8~2.5モル、好ましくは1.9~2.2モル、さらには2.0~2.1モル程度、一般式(II)であれば2.8~3.5モル、好ましくは2.9~3.2モル、さらには3.0~3.1モル程度用いることが好ましい。

【0024】

【化13】



【化14】



本反応で使用する溶媒は、塩化水素に不溶または難溶である溶媒を用いるが、塩化水素の溶解度が、モル分率値として0.04以下のものを用いることが好ましい。このモル分率値が小さい程、その溶媒には塩化水素が溶けにくい事を示しており、モル分率値が小さい程、5-クロロ-2-イソチアゾリン-3-オン類の生成を抑えることができる。この様な溶媒としては、ハロゲン化脂肪族炭化水素類、ハロゲン化芳香族炭化水素類、脂肪族炭化水素類があり、例えばジクロロメタン(0.013 (1 atm, 298.15 K、以下同じ))、ジクロロエタ

ン (0.038)、トリクロロエタン (0.031)、テトラクロロエタン (0.025)、クロロホルム (0.022)、四塩化炭素 (0.013)、モノクロロベンゼン (0.0312)、ジクロロベンゼン (0.022)、ペンタン (0.005)、シクロヘキサン (0.015)、ヘキサン (0.011)、ヘプタン (0.015)、オクタン (0.016) 等が好ましく、さらにはジクロロメタン、ジクロロエタン、トリクロロエタン、テトラクロロエタン、クロロホルム、四塩化炭素、モノクロロベンゼンがより好ましい。また上記の溶媒からなる群より選ばれる2種以上の混合溶媒として用いてよい。

【0025】

使用する溶媒量は、特に限定されるものではないが、原料となる一般式 (I) または一般式 (II) に対して 2~10 倍であることが好ましく、さらには 3~5 倍であることが好ましい。反応温度は用いる溶媒の沸点以下の任意の温度で実施することができる。

【0026】

反応中は上記の一般式 (IV) および一般式 (V) に示すように、塩化水素ガスが発生する。発生した塩化水素ガスは、一部はイソチアゾリンと塩酸塩を形成し、一部は溶媒中に溶け込み、一部は反応系外に放出される。この際溶媒中の塩化水素は、必要に応じて、加熱による留去、窒素ガスによる置換、減圧による留去等の操作で除去しても良い。

【0027】

上述のように、本発明の製造方法により、5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の生成を抑え、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を選択的に得ることができるが、わずかに含まれる5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を除くには、反応で生成する2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の塩酸塩を濾別などにより取り出し、この塩酸塩が難溶であって、かつ塩酸塩と反応しない任意の溶媒でこの塩を洗浄することが好ましい。なお、このような精製過程を追加しても、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の得量の損失はわずかである。

【0028】

得られた2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類塩酸塩は、水に分散し、塩基で中和した後に、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類物と反応しない任意の有機溶媒によって抽出し、溶媒を留去することにより2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を得ることができる。中和に用いることができる塩基は特に限定されないが、炭酸ナトリウム、炭酸水素ナトリウム等の無機塩基、あるいはトリエチルアミン、アンモニアなどの有機アミン類を用いることができ、このうち、工業的には炭酸ナトリウム等の無機塩基が取扱いやすさや経済性の観点から好ましい。なお、中和の温度は特に限定されないが、生成物の着色等を低減するためには50℃以下であることが好ましい。

【0029】

このようにして得られた2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類には5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類が0.5%以下または実質的に含有されておらず、変異原性を起こさない高純度品である。以下に実施例を示す。

【0030】

【実施例】

(実施例1)

塩素吹き込み管、攪拌機、温度計、塩化カルシウム管付きのコンデンサーをセットした、2リットル四つ口フラスコに、N, N'-ジメチル-3, 3'-ジチオプロピオンアミド120g (0.508mol) とジクロロメタン480mlを入れ、攪拌しながら39~41℃の温度範囲で塩素108g (1.523mol) を3時間15分かけて吹き込み、その後室温で一晩攪拌した。生成した結晶を吸引濾過で取り出し、さらにケーキをジクロロメタンで洗浄した。得られた結晶を400mlの水に分散し、炭酸ナトリウムでpH7まで中和した。この溶液をジクロロメタンで抽出し、溶媒を留去し、淡褐色の結晶として2-メチル-4-イソチアゾリン-3-オンを90.12g 得た (収率=77%)。

【0031】

(実施例2)

反応の際に用いる溶媒を表1に示すようにシクロヘキサン (1atom 29

8. 15Kにおけるモル分率0.015)とした以外は、実施例1と同様の条件で反応を行い、2-メチル-4-イソチアゾリン-3-オンを得た(収率=70%)。

【0032】

(実施例3)

反応の際に用いる溶媒及び塩酸塩を洗浄する溶媒とともにクロロホルムとした以外は、実施例1と同様の条件で反応を行い、2-メチル-4-イソチアゾリン-3-オンを得た(収率=75%)。

【0033】

(実施例4)

原料として、N, N'-ジノルマルオクチル-3, 3'-ジチオプロピオンアミドを用い、反応の際に用いる溶媒をジクロロメタン、塩酸塩を洗浄する溶媒をモノクロロベンゼンとした以外は、実施例1と同様の条件で反応を行い、2-ノルマルオクチル-4-イソチアゾリン-3-オンを得た(収率=71%)。

【0034】

(実施例5)

反応の際に用いる溶媒をモノクロロベンゼンとした以外は、実施例4と同様の条件で反応を行い、2-ノルマルオクチル-4-イソチアゾリン-3-オンを得た(収率=71%)。

【0035】

(実施例6)

反応の際に用いる溶媒をモノクロロベンゼンとジクロロベンゼンの混合溶媒とした以外は、実施例4と同様の条件で反応を行い、2-ノルマルオクチル-4-イソチアゾリン-3-オンを得た(収率=70%)。

【0036】

(実施例7)

原料として、N, N'-ジベンジル-3, 3'-ジチオプロピオンアミドを用い、反応の際に用いる溶媒及び塩酸塩を洗浄する溶媒をモノクロロベンゼンとした以外は、実施例1と同様の条件で反応を行い、2-ベンジル-4-イソチアゾ

リン-3-オンを得た（収率=70%）。

【0037】

（比較例）

用いる溶媒を酢酸エチルとした以外は実施例1と同様にして、2-メチル-4-イソチアゾリン-3-オンを得た（収率=51%）。

【0038】

【表1】

	R	反応の際の溶媒	塩酸塩洗滌溶媒
実施例1	メチル基	ジクロロメタン (0.013)	ジクロロメタン
実施例2	メチル基	シクロヘキサン (0.015)	ジクロロメタン
実施例3	メチル基	クロロホルム (0.022)	クロロホルム
実施例4	ノルマルオクチル基	ジクロロメタン (0.013)	モノクロロベンゼン
実施例5	ノルマルオクチル基	モノクロロベンゼン (0.0312)	モノクロロベンゼン
実施例6	ノルマルオクチル基	モノクロロベンゼンと ジクロロメタンの混合溶媒 (0.025)	モノクロロベンゼン
実施例7	ベンジル基	モノクロロベンゼン (0.0312)	モノクロロベンゼン
比較例	メチル基	酢酸エチル (0.240)	酢酸エチル

表1中、反応の際の溶媒の括弧内の数値は、常温常圧下における塩化水素の溶解度をモル分率で表したものである。実施例1から7及び比較例で得られた結晶の純度を高速液体クロマトグラフィーで分析し、変異原性（Ames）テストに供した。結果を表2に示す。Amesテスト中、+は人体などに悪影響を及ぼす陽性を意味し、-は人体に悪影響のない陰性を示す。

【0039】

【表2】

	2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類(%)	5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類(%)	Amesテスト
実施例1	>99.9	<0.1	-
実施例2	>99.5	<0.5	-
実施例3	>99.0	<1.0	-
実施例4	>99.9	<0.1	-
実施例5	>99.9	<0.1	-
実施例6	>99.9	<0.1	-
実施例7	>99.9	<0.1	-
比較例	4.7	5.3	+

表2から明らかなように、本発明の2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の製造方法は、変異原性物質である5-クロロ-2-イソチアゾリン-3-オン類をほとんど含まず、かなり高い選択性で、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を得ることができた。また、Amesテストにおいても全ての実施例において陰性であった。

【0040】

なお、本実施例では、2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類の塩酸塩を濾過により取り出し、この塩酸塩を洗浄して高純度の2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を得たが、塩酸塩を洗浄しなくても、本発明の反応自体がかなり高い選択性をもっているため、十分に高純度の2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を得ることが可能である。

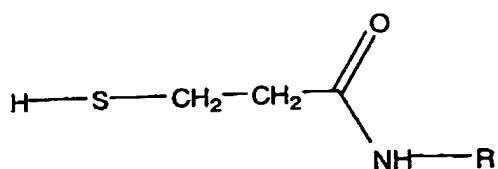
【書類名】要約書

【要約】

【課題】 5-クロロ-2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を含まない高純度の2-アルキル-4-イソチアゾリン-3-オン類を得る。

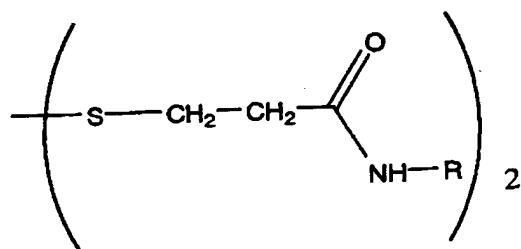
【解決手段】 塩化水素が不溶もしくは難溶である溶媒中で、一般式(I)

【化1】



(ただし、RはC₁～C₈のアルキル基またはアラルキル基)で表される化合物または一般式(I I)

【化2】



で表される化合物と、塩素化剤を反応させる。

【選択図】なし

認定・付加情報

特許出願の番号	平成11年 特許願 第369205号
受付番号	59901269106
書類名	特許願
担当官	寺内 文男 7068
作成日	平成12年 1月11日

<認定情報・付加情報>

【提出日】	平成11年12月27日
【特許出願人】	
【識別番号】	000180586
【住所又は居所】	東京都中央区日本橋富沢町10番18号
【氏名又は名称】	市川合成化学株式会社
【代理人】	申請人
【識別番号】	100073184
【住所又は居所】	神奈川県横浜市港北区新横浜3-18-20 B ENE X S-1 7階 柳田国際特許事務所
【氏名又は名称】	柳田 征史
【選任した代理人】	
【識別番号】	100090468
【住所又は居所】	神奈川県横浜市港北区新横浜3-18-20 B ENE X S-1 7階 柳田国際特許事務所
【氏名又は名称】	佐久間 剛

次頁無

出願人履歴情報

識別番号 [000180586]

1. 変更年月日 1996年 1月 9日

[変更理由] 住所変更

住 所 東京都中央区日本橋富沢町10番18号
氏 名 市川合成化学株式会社

2. 変更年月日 1999年12月27日

[変更理由] 名称変更

住 所 東京都中央区日本橋富沢町10番18号
氏 名 株式会社ケミクレア